

複雑なメディアの影響の解明を目指して

鈴木佳苗

図書館情報メディア研究科図書館情報メディア専攻准教授
(すずき かなえ／社会情報学、社会心理学、教育工学)

今日、家庭や学校へのメディア普及が進み、子どもたちは幼い頃から、日常の多くの時間をさまざまなメディアとともにすごしています。このような状況においては、メディアのネガティブな影響（テレビの暴力シーンの視聴によって暴力的な人格になる、テレビゲームやインターネットの利用によって社会的不適応性が高まるなど）を避け、メディアのよい部分を利用していく（メディアを有効に利用していく）ための能力を育てていくことが課題になっています。

私は、現在、子どもたちのメディア利用とその影響、メディア体験・教育とその効果などの研究を行っています。以下では、最近の研究や研究成果について紹介します。

メディアの影響に関する研究

これまでに、さまざまなメディアの影響に関する共同研究を行ってきました（表1）。それぞれのメディアの影響には、ポジティブな影響もネガティブな影響もあります。こうした影響の違いを規定する要因の1つとしては、接触するメディアの内容があげられます。このような影響の違いを規定する要因に踏み込んで研究を行っていくと、メディアのネガティブな影響を避け、よい部分を利用していくための手がかりが見えてきます。

メディアの影響を規定する要因についての研究

メディアの内容を捉えるための研究手法

表1 これまでのメディアの影響研究

○読書の影響研究	○テレビ・テレビゲームの影響研究	○インターネットの影響研究
・情報活用能力	・攻撃性	・情報活用能力
・共感性	・向社会性	・国際理解
・社会性	・脳活動	・社会性
	・認知発達	・対人関係

に、「内容分析」があります。2002年に、カリフォルニア大学サンタバーバラ校において、世界的に高く評価されている米国テレビ暴力研究（テレビ番組の暴力描写の内容分析研究）の分析手法について学ぶ機会に恵まれました。米国では、かなり以前からテレビ番組の暴力描写に関する問題についての議論があり、数多くの研究が行われてきました。これまでに行われた研究の結果は、テレビ番組の暴力描写が短期的、長期的に人々の攻撃性の学習を促進するといった悪影響を及ぼす場合があることを示唆してきました。しかし、全ての暴力描写がすべての人に同じような影響を及ぼすわけではなく、視聴する内容によって、攻撃性の学習が促進される場合も、抑制される場合も見られます。例えば、身体的手段などによる暴力行為の後に加害者が報酬を得る（文脈的要因：報酬）など、暴力行為に加害者にとってのよい結果が伴う場合には攻撃性に対する影響は強まり、一方、加害者が罰せられたり（文脈的要因：罰）、被害者の被害が重かったり、ひどい苦痛を伴う（文脈的要因：被害者の被害や苦痛の描写）など、暴力行為に悪い結果が伴う場合には攻撃性に対する影響は弱まると考えられています。

米国テレビ暴力研究では、研究者が検討を重ねた30以上の暴力描写の文脈的要因が

取り上げられていましたが、それらに日本独自の項目を追加して、2003年度から日本のテレビ番組の暴力描写の内容分析の共同研究を始めました。この共同研究では、どのような暴力描写の文脈的要因が実際のテレビ番組にどのくらい含まれているかを調べるだけでなく（内容分析研究）、暴力描写のそれぞれの文脈的要因の視聴が小学生・中学生の攻撃性や向社会性（社会の役に立とうとする、人を助けようとする）にどのような影響を及ぼしているのかについても検討しました（複数年に渡る縦断調査）。その結果、内容分析によって実際のテレビ番組にある程度含まれていることが示されており、且つ縦断調査によって攻撃性への影響が見られた暴力描写の文脈的要因として、身体的手段による暴力（小中学生の攻撃性を促進）、被害者の被害や苦痛の描写（小学生の攻撃性を抑制）の存在が示唆されました。

メディアの影響を検討するための縦断調査は、2002年以前から行ってきましたが、このように内容分析研究と組み合わせることによって、テレビ番組視聴のポジティブな影響、ネガティブな影響をより詳細に検討することができるようになりました。内容分析研究は、分析項目の設定、人や費用の確保が難しい研究ですが、こうした制約を克服し、同様の方法を他の研究にも応用

していくことができればと考えています。

メディアを主体的に利用することによる影響

先述の研究で示された、テレビ番組の暴力描写の文脈的要因やその及ぼしえる影響について知ることは、暴力描写が伝えるメッセージ（文脈的要因）を偏りなく読み解くことにつながっていくのではないかと考えられます。この「メディアが伝えるメッセージを偏りなく読み解くこと」は、メディア社会を生き抜くために重要であると考えられている「メディア・リテラシー（メディアの読み書き能力）」を構成する能力（以下で紹介する「メディアを主体的に読み解く能力」）の1つと位置づけられています。

「メディア・リテラシー」の定義については議論がありますが、日本のメディア・リテラシーの主要な定義としては、総務省が2000年に示したものがあります。この定義では、メディア・リテラシーは3つの能力

（「メディアを主体的に読み解く能力」「メディアにアクセスし活用する能力」「メディアを通じコミュニケーションを創造する能力」）を構成要素とする複合的な能力であるとされています。

このメディア・リテラシーに関連して、2005年度から、図書館情報メディア研究科の教員、企業、図書館、学校などとの連携によって、子どもたちがメディアを主体的に利用し、コミュニケーションするといういくつかの取組みを始めています。こうした取組みの例としては、小中学生を対象とした公共図書館でのワークショップ（「共同で何かを作る場所」であり、仲間と楽しく創作することを通して創造性やコミュニケーション能力を引き出すことができることが期待されている活動）（図1）、中学生を対象とした映画制作ワークショップ、小中学生を対象とした読み聞かせ体験プロジェクト（自分たちが絵本の読み手になって、低学年の子どもたちに読み聞かせを行うプロジェクト）などがあります。



図1 2007年12月の公共図書館（牛久市立中央図書館）でのワークショップ^注の様子

注）図書館の本を使って調べたことを粘土によって表現するという新しいワークショップ

これらのプロジェクトは、社会貢献活動としての意義に加えて、研究面でも今後の展開が期待されます。現在は、子どもたちがこのようなメディア利用体験や周囲とのコミュニケーション等によって、どのようなことに気づき、どのような変化が見られるのかを検討しています。主体的なメディア利用体験を通して、子どもたちはメディア利用の楽しさを実感し、また同様の体験をしたいという動機づけの高まりも見られます。しかし、その一方で、メディア利用の難しさを実感し、自分でできるという感覚が低下することなどが見られる場合もあります。メディアのよい部分を利用していく（メディアを有効に利用していく）ためには、メディアを主体的に利用することによる影響の研究をさらに進めるとともに、影響の違いを規定する要因についても検討していく必要があると考えています。

今後の研究

さまざまな要因によってポジティブな影響もネガティブな影響も見られることから、も示唆されるように、メディアの影響は複雑です。その複雑な影響についてさらに研究を進めていくために、海外の先進的な研究機関で学び、さらに研究を発展させていきたいと考えています。その第一歩として、2008年夏からしばらくの間、メディアの影

響研究に実績のある米国のアイオワ州立大学のAnderson教授のもとで、メディアの影響研究を行うことを予定しています。

また、今後、読書の影響、テレビ、テレビゲーム、インターネット等のさまざまなメディアの影響および影響を規定する要因についての研究を進めていくことによって、研究の成果を学校等の教育現場で活かしてもらうための取組（授業や教材の開発など）とその効果を検討する研究を行っていきたいと考えています。そのためには、海外のメディア環境やメディア教育の取組みを知ることも参考になります。数年前に、東アジア、北欧のメディア教育の状況の調査（文部科学省委託調査「青少年団体におけるメディア・リテラシー教育の取組と家庭・学校・地域の連携」）への参加を通して、メディア教育の先進的な取組みや教材、メディア関係者の意識の高さなどを知りました。メディアの影響研究と、海外のメディア教育の調査がそれぞれ独立したもののように感じられた頃もありましたが、今では、それぞれの研究が相互に、あるいは別の研究への刺激になっています。今後も、いろいろな刺激を受けながら、複雑なメディアの影響を解明するための研究を続けていきたいと考えています。